

参加
無料

ヴァナキュラー文化研究会講演会

証言と抵抗の歌

―ペルーのアンデス村落における 内戦期から今日までの物語―

Testimonial Songs and Protest Music in Peru's
Civil War and Today

3月15日(金)

15:00-17:30

【講演言語】 英語（通訳なし）、日本語

【概要】

1980年代から1990年代にかけて、ペルー南部アンデス地域の先住民村落は、ゲリラ組織センドロ・ルミノソと国軍の対立の中心地となった。この内戦を経験した人々は、ワイノやブンピンといった音楽の中に、その記憶を証言として語り伝えている。内戦後も国家による先住民への暴力や弾圧は終わっていないが、若い世代はヒップホップなどの都市音楽を受容し、政治批判の手段に利用し始めた。本講演会では、社会正義や先住民の権利要求のスペースとなっている証言と抵抗の音楽について、演奏を交えながら考察する。

会場：立命館大学衣笠キャンパス
創思館408教室（対面のみ）

■ 司会 安保寛尚（立命館大学）

■ 登壇者

レンソ・アロニ（ペルー・カトリック大学）

ペルーの首都リマで生まれ、アヤクチョ地方で育つ。メキシコ国立自治大学で修士（文化人類学（民族音楽学））、カリフォルニア大学デービス校で博士（アメリカ先住民研究と人権）を取得後、2020年から2023年までコロンビア大学にて民族・人種研究センター研究員を務める。専門は、およそ1980年から1992年まで続いたペルー政府とゲリラ組織の対立期におけるアンデス先住民の記憶、抵抗、文化の研究。ケチュア語とアンデスの知についてのポッドキャストKUSKALLA ([HTTPS://KUSKALLAABYAYALA.WEEBLY.COM/](https://kuskallaabyayala.weebly.com/)) の共同ホストも務める。

イルマ・オスノ（早稲田大学、法政大学、アヤクチョ民衆音楽の歌手）

ペルー南部のアヤクチョ県ウアルカス村生まれ。12歳までケチュア語のみを話し、地元の伝統文化のなかで育つ。政府とゲリラ組織の武装対立の影響を受けて首都リマに移住後、大学で教員資格をとり、中学・高校でスペイン語教員をつとめる。同時にサン・マルコス大学で民族舞踊を学び、アヤクチョ民族舞踊団メンバーとして活躍。現在はスペイン語講師、ミュージシャンとして活動中。これまでに笹久保伸との共作アルバム「アヤクチョの雨」(2013)、ソロアルバム「タキ アヤクチョ」(2016)、マリアナ・バラフ・マリアナとの共作アルバム「BRISA CON TRES AROMAS」(2021)をリリースした。

